

# 保健室の四季より

○けがをさせるな、火事出すな

○泣き虫の懺悔、最後の授業

永井 瑞江

## —はじめに—

たまたまその時私は、31年間の教師生活を一冊の本にするつもりで『保健室の四季』と題し、第1章「保健室今昔」から第15章「我が半生の本音」迄720枚を書き上げた時でした。その中から私は、将来乳幼児教育に携わる若いみなさんに贈るつもりで、

- 1、成長の記録から生命の尊厳を
- ②、けがをさせるな 火事出すな
- 3、心の絆創膏をいつもポケットに
- 4、統計のためではない身体測定
- 5、ムシバとの追いかっこ
- 6、家庭に代って排便指導まで
- 7、子どもにもできる下着の管理
- 8、子どもにこそ必要なケガの勉強
- 9、人間はなぜパンツをはくのか
- 10、遠足二つの教訓、一年生初の遠足
- 11、だれのための学校給食
- 12、小動物と子どもたち —コメットさんの死—
- 13、エPILEプシー(てんかん)からのメッセージ
- ⑭、泣き虫の懺悔、最後の授業

を選んでお話をしました。

## けがをさせるな 火事出すな

学校の事務室に郵便貯金の仕事で来ていた青年局員、その顔に見覚えがあるので私はこういう時いつもやるように微笑を浮かべつつ、わざと青年をじろじろ見ながら近づいて首をかしげるとやっぱり向こうから聞いてくれました。

「先生、おぼえている？」

「Tくんだよねえ、幼な顔が残っているしTくんのことは忘れていない、柿の木から落ちたTくんだもの」

養護教諭としてこの学校に赴任したのは昭和27年です、それから何年目かの秋のこと。

実はこのT男の事故の時、学校内のしかも授業時間内に起きたことなのに私はすべてがすんだあとで知りました。

厳密に言うと、すべてすんでから知ったというのではなく、T男が10日余り欠席した間にも養護教諭としてなすべきことはあったのになんにもせずに、職員会の席で他の教師と同じように学級担任の事故報告を聞いていたのです。

当日の事故直後には関わることができなかったとしても、私は養護教諭として当然、脳症状のために半月近くも欠席しているT男を家庭訪問して、柿の木の落下から脳圧迫の過程を念入りに聞き明日からの職務に生かすべきだったのです。

ところが当時の私は、養護教諭である自分がこの事故から除外されていることに腹も立てなかった——つまり、専門職としての自信も誇りもなかったということになります。

実は昭和27年も秋の終りに、保健婦資格を取得したばかりの私が赴任するまで此の学校には養護教諭がいませんでした。

それまで予防接種などには校門の直ぐ真向かいにあった村役場から保健婦が学校に出張して行ない、ふだんは、西風がもろに当たる物置きのような小部屋に『衛生室』と書いた看板が下がってはいても部屋には誰もいなかったのです。富士山小と東塩田小の合併直後で900人からの大校でしたから子どもたちのケガも頭腹痛もあったと思

うのですが、おおかたは学級担任が適当に処置するか、少し厄介な訴えの時には校内唯一の『お母さん教師』であった家庭科専科の雲井先生に相談して解決していました。

また、よくしたもので子どもたちも親たちもそういう実情を心得てめったに痛い痒いを訴えたりしなかったのでしょう。

そこへ看護婦と保健婦の資格を持つ私が衛生室の主として赴任したのですから、日常的な小ケガの応急処置や月例体重測定や虱退治のDDT撒布や蛔虫退治の海人草煎じだけをするのではなく、子どもが柿の木から落ちたというような時はいち早く現場に駆けつけて適切な判断と処置をしなければならないのに、恥しいことながらその時の私は全く役に立たない存在でした。

学級担任の小林先生は教職30年余になるベテラン教師です。事故の時仮りに自分の娘より若く何ごとにも未熟な養護教諭の存在を思い出したとしても、信頼して任せるという気持にはならなかったのでしょう。

無視されれば傷ついて当然なのに、当時の私には、ないがしろにされても傷つくほどのプライドがなかったのですからお話になりません。

だからといってもしこの時「専門家だろう、さあ、こういう場合はどうするのだ」と私が頼りにされたとして果たして何ができたでしょう、そう思うとその想像の方が恐ろしい。

当時まだ頭部外傷や打撲の観察と判断、必要な処置については定説もなく、意識不明になるほどの頭部打撲は脳溢血や脳梗塞に準じてひたすら安静にするほかに手の尽くしようがなかったころです。

私は18才のころ、開業して間のない外科医院の看護婦でした。（中国から引揚げて開業、20年のキャリアのある医師）日々患者が増えるのに看護婦はひとりきりでしたから一度にさまざまな経験をしています、外来から手術の介助までいっさい。2年間に休みは盆と正月にとっただけ、土曜も日曜もなく、夜昼なしの勤務です。

しかし小さな外科医院のことですから、虫垂炎の手術だけは何百と介助しましたがあまり難しい患者は見ていません。特に意識障害を併うほどの頭部外科の看護経験は、今も患者の名を忘れられないWという少年の手術一例だけです。頭蓋骨の一部がバラバラになったものをシャーレに並べて再び脳膜の上にパズルのようにはめました。幸

い後遺症もなく治った事例です、脳幹に影響のない頭頂部の浅い頭蓋挫傷だったのでしよう。この時のさほど不安も怖れもなかった経験は、その後の私の頭部外傷に対する油断につながっていてT男の柿の木転落まで尾を引いていたように思えます。

今ならば脳外科に運んでCT写真を撮りすぐさま開頭手術して脳内の血液をチューブで外に出し、まず2ヶ月の入院でしょう。

その後30年の間には頭部外傷の子どもに直接関わる機会が無数ありましたが、目に見えない部分で重大な変化を起こすかもしれない頭部外傷の一つ一つに、学校保健の専門職らしく緊張するようになったのはもっと後になってからです。現職教育で新しい情報を得たり、改めて脳の仕組みと働らきを勉強するほどに、子どもたちの頭部外傷を認識し直して同時に私なりの判断基準ができ又初期の処置と管理も心得て来ました。

恐らく、T男が柿の木から落ちた現場に私が居合わせたとしても甘才になったばかりの私は適切な処置はできずにもっと重大な恥をかき取り返しのつかないことになっていたかもしれません。

学校の敷地内にある樹木で実のなるものはクルミでも梅でも、どこの学校も時季になると5、6年生の子どもたちが収穫し売って児童会活動費などにします。田園地帯の学校にとって実のなる樹木は一つの財源です。でも柿の木は学校地にふさわしい木ではありません。柿は古木になると枝が折れやすくて子どもたちが自由に登るには心配——。でも30年前学校地の東北の隅、清水池の土手のあたりに一本だけ柿の木がありました。

学級担任はT男が木から落ちた時、木の下にしばらく横にさせて様子を見ました。

「もう大丈夫」と言って本人が立ち上がり広庭で友だちと遊び始めた時は一見元気そうでした。でもこの時T男の脳内のどこかで血液がにじみ初め、ゆっくり脳圧迫の準備が始まっていたのでしよう。嘔吐が始まったのは帰宅後だったのこと。

「そうです、柿の木から落ちたTですよ。もう息子が中学生です、川西に住んでいます」

「時々思い出していたのよ、Tくんのけがのこと——」

「いやあ、御心配かけました」

「それがねえ、あの時私はちっとも役に立たなかったの、養護教諭初任のころの恥ずべき時代だったから。ほんと申し訳ないなあ、あのころの子どもたちにも先生たちにも」

全く私は初任の頃、学校保健の管理も指導も何をすべきかわからず、さりとて月給泥棒といわれたくないから見当違いなことばかりして多忙なふりをしていたようです。災難だったのは当時在籍していた子どもや一般教師でしょう。ここ一番の時に役に立たない養護教諭がひとり一人前の顔をして専門職の席にいたのですから。

翌年の3月、T男たちの卒業の時に小林先生も退職しました。日頃から教師の三大心得として『火事出すな、けがをさせるな、嘘教えるな』を信念として来た模範的な信州の教師だった人です。小林先生の少々早過ぎる退職の決意の陰に、T男のケガのことが動機としてあったことは確かでした。

教職を退いて暫くは「遠足の夢をよく見る」と小林先生は言いました。子どもたちの長い列を校門の外に連れ出す時の気遣いはたいへんなもので、無事に連れ帰るとほっとする、あの特異な緊張感が教師を辞めてからの夢に出てくるのでしょうか。

校長職を最後に退職した人がどんな夢を見るかは知りません。しかし、まぎわまで子どもたちと共にいた学級担任が教職を去って見る夢は、ぞろぞろと子どもを連れて、『後部の集団はちゃんとして来ているかな、いつものはみ出しっ子は大丈夫かな』と時々振りかえりながら、車が来れば笛を吹いて道の端に子どもたちを寄せて、そして又先頭の一番小さい子どもの歩巾に合わせて歩く遠足の夢だという小林先生の言葉に、私は『本物の教師ならば、教師をやめて暫くは遠足の夢を見るものなのだ』と思い決めるほど心打たれたものです。

子どものケガのたびに辞表を出していたら学校の教師も幼稚園の教師、保育園の保育母共に10年と身が持ちませんが、『そのくらいの覚悟は必要なのだ』と私は小林先生を見て思いました。

少なくとも、万一誤った判断や処置をした時は再びその誤ちをくりかえさないという自信がなければ教職に止どまってはならないのだ——と思いました。

ケガをさせないために子どもたちを囲いの中に入れてじっとさせておくのではあり

ません。存分に遊んでもやたらにケガをしない子ども、ケガをしても適切に判断し臨機に自分を守ることでできる子どもを育てる責任が親にも教師にもあるということなのです。

そういう意味を含めてどんなふうにもでも拡大解釈のできる、含蓄のある教師心得ではないでしょうか。『火事出さな、ケガをさせるな、嘘教えるな』という心得——。ケガをさせるな——、そう、子どもたちの心にもからだにもです。

この戒めはいつの時代でも教育の原点ではないかと思うのです。

嘘教えるな、怪我をさせるな火事出さな、と、教師の三原則を具体的な言葉で提唱した人は、明治の末に長野師範を出て昭和20年頃まで教職に在った、信州教育界の巨頭のひとり長坂年郎先生です。

昭和10年代、よんどころなかったにせよ満蒙開拓義勇軍に日本一多くの少年たちを送って犠牲にした信州教育の歴史を思うと、『嘘教えるな』も『怪我をさせるな』も如何にも皮肉ではありますが、それはさておいてこの言葉、やはりなかなかの名言だと思います。

---

## 泣き虫の懺悔、最後の授業

---

例年私は学年末の3月体重測定の時には「私のからだ一年間の反省と新年度への決意」と題して特別の保健指導をしました。

月例体重測定時に、13の学級に10分間ずつ、5月は「健康のカギ、きまりよい排便」6月は「きれいなからだとパンツの話」7月は「血液と朝ごはんの話」と、毎月指導して学年末には、1年生にもわかるよう全員の名前を書いたグラフを用意します。この1年間に病気欠席した数は名前の上にしるしをつけ、登校後具合が悪くなった回数は名前の下にしるしをつけておきます。

頭痛は○、発熱していた頭痛は●、腹痛は△、嘔吐は▲、脳貧血は★と約束の記号をつけてあるので一目瞭然です。その他に、特に大きなケガ、中でも首から上のケガは赤丸がついています。

どの子も自分の名前の上下についている○や△の数を見て、

「ええっ、ぼく3回もハライタ起こしたっけ？でも休まなかったぞ」とか「脳貧血の星じるし、私5つもついている、学校中で一番多いんだねえ、どうしてかな」

「うわあ、ぼくひとりで頭のケガ3回だよ、どうなってるの」

日付けの横に（ブランク）（投石）（しょうとつ）と原因も小さく書いてあるので子どもたちは否定のしようもありません。来年はこんなしるしつかないように気をつけるぞ！と子どもたちが自覚するように、450人の子どもがひとり残らず自分をそこに発見できるグラフです。

このグラフを作るのもこれで最後だな、と思いながら資料を仕上げ、保健室に貼ります。私にとって1984年3月は、31年間の教職生活最後の月でした。

月例体重測定時に「永井先生の黒板を見てください」と言って始める私の保健指導が毎月定着してからようやく5年目でした。それ以前は見てくれるかどうかわからない保健指導の資料を絵入りで作っておいて月々掲示板に貼り替えをしたり、学級指導してくれるかしてくれないかわからない指導資料を学級担任の机の上に置くだけだったので

.....

毎月の保健指導、私が秘かに「いのちの勉強」と呼んでいたこの保健指導が定着してようやく5年、やり残したことを考えるとまだ辞められぬ思いもありました。でも1984年の3月12日と13日、いつものように男の子は廊下の北側に女の子は南側に上ばきをきちんと並べて保健室に入ると、壁に貼った私の黒板、つまり白ボール紙に自作絵入りの資料やグラフですがその前に子どもたちは4列に坐って膝を抱いて顔を上げ私の言葉を待っていました。

もちろんこの時点で子どもたちは私がこの3月で退職することなど知りません。

私は最後の保健指導の時、『盲導犬』の話をしたと思っていました。盲導犬……直接学校保健とは関わりがないように見えそうですが、私の計画の中に盲導犬が現われたのはきのうきょうではありませんでした。

上田交通別所線の車中でのことです。いつものようにAさんが盲導犬といっしょにその電車に乗りました。

Aさんは目が不自由になる前は教育委員会で学校現場に関わりのある仕事について

いたこともあり、住まいはこの学区内です。そのころAさんの子どもは中学生、障害の直接原因は交通事故でした。

様々な訓練を経て今、市役所の交換台の仕事をしています。自宅から約2キロメートルの道を下之郷駅まで歩き電車に乗ります。上田駅の陸橋を上り下りして駅前の通りを市役所まで約1キロ歩きで通います。市役所でもエレベーターは使わずに盲導犬と共に階段を一段一段上り下りします。

実は私は1982年東京での全国障害者研究集会で一日、長野盲学校の坂本先生と行動を共にしたことがあります。坂本先生の盲導犬は盲導犬の中でも選り抜きの優等生のようで、あの都内の複雑な電車の乗り替えにも実に落ち着いていて、特に食事の時、会議の時の態度には頭が下がりました。

くらべてAさんの盲導犬はちょっと気が散るようです。

Aさんは電車の後方扉から乗るとまず乗り口から真っ直ぐ突き当たりの、つまり反対側の扉の前に立ちました。白い毛の痩せた盲導犬もじっと立っています。

扉の直ぐそばの座席、朝の出勤時間にはそこがなんとなく指定席になっていて、又廻りにも知人がいて助けてくれるのですが、帰りの電車の乗客は不特定多数です。

扉のそばの、座席に大きな荷物をひとり分置いて腰かけていた婦人が、何か恐れるような顔で荷物を引き寄せて席を詰め人ひとり分あけはしましたがAさんに「あいてますよ」とは言いません。まして手を貸してかけさせてくれるようすはありません。

この婦人が気がきかなくても他の人が誰か手を出してくれないのか？ 私はずっと離れたところにいたのですが、どうも近くの高校生も他の乗客も手を貸すようすはありません。私はそばへ寄って「ここあいていますよ、一番目です」と、犬の白いバンドといっしょにAさんの腕を支えて腰かけてもらいました。

こんなことは勇気とは関係ありません。目の見える者の当然するべきことです。私は私の学校の子どもたちにはこういう時に手を出せる人間になってもらいたい、いつかこの話をしよう、と思っていたのです。

少し前、学校に盲導犬の育成協会から一冊の本を送って来ました。厳しい訓練とテストに残った数少ない盲導犬のことを、子どもたちに理解してもらいたいという願いで送って来たのでしょうか。道徳の時間にでも扱ってもらいたいという願いもあって送



られたのでしよう。

でもその本は職員の湯呑み室の本棚に入ったままで、教室に借り出して子どもたちに話してやる学級担任はいないようでした。

殊にこの学区には盲導犬の案内で自宅と職場を往復し公務員として働らいているAさんがいるのです。児童朝会の時AさんとAさんの盲導犬に講堂のステージに上がってもらって話をしてもらうことも頼めばできるのです。

私は在職中時々考えました。

道徳の時間を『福祉』の時間にしてはどうだろう、同和の時間を『福祉』の時間にしてはどうだろう、と――。

特別教育活動の中の道徳の時間や同和教育が、差別を憎み思いやりの心を育てるのが目的ならば、福祉の時間を毎週一時間必修にする方が手っ取り早いと思うのです。福祉とは大学の福祉科で学ぶだけのものではないはずですよ。

私は3年前から日本てんかん協会長野県支部の代表として、てんかんという病気が、病苦というより『病名苦』ともいふべき憂き目に会っていることを知り、正しく理解してもらうための啓蒙活動をしています。人口の1%は患者です。近ごろのように頭部外傷の機会が多ければどこの家庭にも起こり得る疾患なのです。原因が不明だった昔は遺伝病の代表のようにいわれ、治る望みのない病気だと思われていました。脳神経医学の進歩により今では展望も開けて来ているのに一般市民の“てんかん、に対する誤解と偏見は相変わらずです。

病気に対する誤解と偏見を正す教育もできるように学校教育の中に『福祉』の時間がほしいものだ、私は思うのです。

或いは私の主張は無茶苦茶かもしれませんが、毎年どこの学校でもあんなに熱心に道徳教育や同和教育の指導案を作って指導主事を何人も招いて研究授業をしているというのに、子どもたちが乗る別所線の電車の中に盲導犬といっしょにじっと立っているAさんに手を貸そうとする少年も青年も大人もいないということは、やはり何か間違っているということではないでしょうか。

差別の元には誤解がある、つまり正しい理解がないためです。私が代表をしている日本てんかん協会長野県支部でも、「誤解されるからかくす」「かくすから誤解され

てしまう」の悪循環をくりかえして、いつまでも啓蒙運動が広がりません。

『ぼくの病気でんかん』という、子ども向きのテキストがあります。抗てんかん薬を服用している子どものことを友だちに理解してもらいたいという願いで日本てんかん協会が1984年に作成しました。学級指導にこのテキストを使ってくれた学校は全国でたった21校だけです。その21校の殆どどの学校が同和教育の時間をほんの一時間『ぼくの病気でんかん』のために使わせてもらいました。

私はもう何年間も、障害と病気への偏見差別を正規の授業で取り上げられるのはいつだろうと思いつけて来ました。『ぼくの病気でんかん』を指導して感想文集を集めた学校は、いわば小学校での福祉教育のはしりです。

私が教職最後の授業で各学級の子どもに話して聞かせた『盲導犬とAさん』の話、心をこめて話しましたが果たして、思いやりの心を育てる遠大な教育の役に立ったでしょうか。

「みんな、ちょっと目を潰ってAさんの気持になってください。オジサンソコノ席アイテルヨ、と誰かが声で教えてくれました。でも目の見えないAさんにはあいている席は見えません。ソコノ席アイテルヨって言って上げるだけでも知らんぷりしているよりは親切かもしれないけれど、その時Aさんのそばにいる人の中には声をかけてあげる人がいませんでした。心の中ではなんとかしてあげたい——と思っている人はいたのかもしれませんが。犬がこわくてそばに寄れないという人もいるかもしれませんがね。でも盲導犬は3時間でも4時間でも主人の声がかかるまでじっとしてられる辛棒強い優秀な犬ですからこわくないのです。決してかみついたりしません。だからそばに寄ってAさんといっしょに犬の白いバンドの手のところを持ってあいている席の前まで連れて行くのです、声もかけてね。黙っていきなり連れて行こうなんてしたらAさんも犬もびっくりするからね、オジサン、アイテル席マテ行キマショウ、テツグイマスヨ、と言える人になってください」

もちろん、この子どもたちのみんながみんな、障害を負う人と居合わせた時に適切な判断をして、ちょっとした勇気で手をさし出せる人になれるわけではないことはわかっています。

私自身も、気持だけやきもきしながら何もして上げられなくて自己嫌悪に陥ったことがこれまでに何度あったかわからないのですから。

1984年3月の保健指導——、この子たちにこんなふう話すことのできる最後の機会です。私は心をこめて子どもたちの目に私の願いを話しかけました。

戸惑う目、ウンとうなっている目、うなづいている目、いろいろでしたがひとりとしてソッポを向いている目はありませんでした。

盲学校の坂本先生の盲導犬は都電で先生が腰かけると先生の足の間にその大きなからだを入れて坐り、尻尾も前脚も邪魔にならないようにしていました。Aさんの盲導犬は無防備で、右の前脚を長く通路に出して坐り尻尾も丸めないののでうっかりすると他の乗客に踏まれそうです。

きっと子どもたちはこういう時、手をさし出して助けることはできなくても、電車に乗り合わせたら盲導犬の尻尾が乗客に踏まれないようにその近くに何気なく立って、Aさんの盲導犬を守るような役はしてくれるに違いありません。

各学年2学級ずつ、1年生には1年生の言葉で3年生には3年生らしく、学年が上がるごとに少しは難しい言葉も使って6年生まで私の最後の話をし終えると残っているのは養護学級です。養護学級はたった4人ですがなおのこと誠実に話します。

担任の宮崎先生まで子どもといっしょに膝を抱いて坐って私の顔を見えています。T男もY男もSちゃんも黙って私の顔を見えていました。

瞬間、この養護学級誕生の頃を思い出しました。養護教諭二級免許状のために児童心理、教育心理などの通信教育を受けていた時で私は青春の真っ只中。敗戦の昭和20年前後に生まれた子どもたちの中には障害を負う子が多くその子たちが学齢になっていました。

初めは教育心理のレポートを書くための観察でした。でも、前後を考えずに夢中になる私のくせで気がついた時は保健室が養護学級になっていました。まだ障害児教育などなおざりのころ、というか、何もかも戦後の立直しがやっとならなくて障害児教育どころではなかった時代です。

でも私の青春はK男、A子、S男、T<sub>1</sub>子、K子、T<sub>0</sub>子と共にあったのでした。この時の記録は「二プロの子たち」と題して別にまとめてありますが、裏を返せばそのこ

ろ私には私の本来の職務である学校保健の何たるかがわからず、障害を負った子の教育にこそ意義を見出した迷える養護教諭だったということになります。

最後の最後の保健指導のその時、子どもといっしょに小さく膝を抱いて坐って私の話を聞いてくれる養護学級担任の宮崎先生一。Y男が小さい声で話しかければ彼女も小さい声で答える、つまり子どもの視線の位置に降りて更に腰をかがめて授業する姿を見たことがあります。難産のために肩が脱臼したS男の腕の力をのばすにはどうすればよいか、マッサージの勉強までしてS男とマット運動をする姿も見ました。

働き者のT男が原学級から無視されると我が事として口惜し泣きする涙を何度見たことか。子どもと同化してしまっただけでは疲労困憊するよ、夢中になるのもほどほどにしなければと忠告しながら私は、宮崎先生の青春に私の青春を重ねて懐かしく思い、同時にこのやり方では息が切れるのではと心配でした。

県下でも誕生が早く歴史の長い養護学級でありながら、地域のこの学級に対する誤解と偏見が一見澄んで見える泉の底によどんでいてそのために該当の子の家族からも敬遠されがちです。

子どもたちの負う障害が単に重い軽いだけでなく、あまりに多面的で百人百様ですから養護学級と普通学級のどちらがその子にとって幸わせか、一口でいえない難しい点があるからですが、先入感で養護学級を敬遠する人が多いのは残念です。

理想的な教育は、一学級の定員を20人以下にして、遅れた子も進んでいる子も助け合って学習する学級かもしれません。もちろん教育課程もずっと下げて、I Q100ならば学校の授業だけで理解できる程度の内容にし、ゆとりのある子はクラブ活動でエネルギーを発散させ、理解に時間がかかる子の特別教育も学級の中でするのです。

養護学級が発展的解消されるような教育体系を私は夢のように考えています。但し、養護学校はますます充実させるべきで高校部の受け入れも増員してもらいたい。

私が保健室を養護学級にしてしまった30年前は、精神薄弱らしいというだけで何年でも就学猶予してそのまま就学免除にしてしまった時代です。しかも学級定数は53人！だからあの時は子どもたちのためにひたすら養護学級が欲しかった――。

40人学級さえ実現が遠い臨調行革の今、私の夢は向こう10年は夢のままかもしれま

せん。

こうして私の、万感の願いをこめた最後の授業は、養護学級の子どもたちに声をかけてそしてついに終わりました。

(元東塩田小学校養護教諭)